昭和への遺書

岡潔

／敗るるもまたよき国へ

昭和への遺書／敗るるもまたよき国へ

岡潔

月刊ペン社

© Kiyoshi Oka, 1968

昭和への遺書／敗るるもまたよき国へ

昭和四十三年六月二十日　初版発行
昭和四十三年七月二十五日　三版発行

定　価　四八〇円
著　者　岡　潔
発行者　原田倉治
印刷所　亨有堂印刷所
発行所　月刊ペン社
東京都中央区銀座東三の二
美術家会館ビル
電話・東京(03)五四二・一九六〇(代)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

まえがき

一九二九年の晩春、私はシンガポールの渚にひとりで立っていた。海岸から二本の太い椰子の木が斜めに海に突き出ていた。遙かむこうには二、三軒の土人の家が、高い床の脚を波に洗わせている。私は、これが伊勢神宮の原型ではないか、と思いながら、寄せては返す波の音に聞き入るともなく聞き入っていた。

すると突然、強烈極まりない、名状し難い感情に襲われた。私はこの説明できない激しい感情の中にじっと浸っていた。これが「懐かしさ」という情緒だと思ったのは後になってからである。

その時以来、私は日本民族の主流がこの辺を通って北上したことを疑わない。でなければ、なぜあのような強烈な懐かしさに襲われたのだろうか。これが、私の日本民族に関心を持ちは

じめた端緒である。私の数え年二十九の時であった。

私は渡仏の途中シンガポールに立ち寄ったのであって、そのフランスには三年いた。むこうで暮らしはじめているうちに、日本には水や空気のようにいくらでも溢れている何か非常に大切なものが、ここには欠けているのに気がついた。私はその欠けているものを真剣に求めた。

ある日、ふとセザンヌの風景画に見入っていると、変に淋しくなってきた。色彩の素晴らしさや絵の巧みさは唸るばかりだが、見ていると妙に心が淋しい。私はこれだなと思った。

近ごろ私はこれと対蹠的な日本の画を知った。去年の十月ごろ大阪の毎日新聞に熊谷守一という人の画の写真版が出ていた。私には初めて聞く名前である。その画面には双葉が十本ぐらいと蟻が五、六匹線描きしてあった。それだけの画だが、見ていると不思議に心が楽しくなってくるのである。フランスにはなくて日本にあるものがこれなのである。ともかく私はセザンヌの画が淋しくて、日本がよく知りたくなった。帰ってからは芭蕉とその一門のことを真剣に調べた。次に道元禅師の「正法眼蔵」を実に真剣によんだ。

他方私の滞仏中、一九三二年に満洲事変が勃発した。私は日本はどうなってしまうのだろうと思った。その後も日本は心配な方からより心配な方に歩みを続けてその歩調を変えない。とうとう寝耳に水で大東亜戦争の勃発を聞かされたとき、私は日本は亡んだと思った。私は一億同胞と共に死ぬ覚悟を決めた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

日本民族の中核の人々は、心（真我）を自分だと思っている。五尺のからだ（小我）を自分だなどと思ってやしない。肉体は二つよせても一つにはならないが、心を二つよせると合わさって一つになってしまう。だから日本民族の中核は一つの心である。これを日本民族の心と呼ぼう。日本民族の中核の人たちは、自分は日本民族の心の中から生まれてきて、またそこに帰って行くひとひらの心だと思っている。私もそう思っている。だから死を視ること帰するが如く、即ちふるさとへ帰るように死ぬことができるのである。

それでは日本人とはどういう民族だろう。

私は長いつらい戦争のあとの日本の有様を見て、日本民族はここで亡びてしまうのではなかろうかと案じて、身も世もあらず心配した。そういう人は私だけではないとみえて、私はブラジルにいる日本人から、お前は日本民族を守り抜いてくれという実に長文の手紙を受取った。

私は日本民族を知るために、初め仏教によって明治以前の日本の歴史を調べた。しかし、このやり方では日本民族の心の色どりがよくわからない。そこで次に、歌と俳句とで描かれた日本の歴史を解き展げてみた。それをちょっとお話ししよう。

八雲立つ出雲八重垣妻ごみに
八重垣つくるその八重垣を　　（すさのをの尊）

季節は夏であろうか。自分が妻を得たことを共に喜んでくれるように、この国の八方には雲の峰が立ち並び、自分の妻ごみの八重垣を作ってくれているのであろう、という歌で、澎湃として天地に充つる喜びである。これが神代調（かみよちょう）というものだろう。雄大雄勁にして喜びに充ちているのである。人麿、赤人あたりまでは確かに神代調である。

ものの ふの八十氏川の網代木に
いざよふ波の行方知らずも　（人麿）
わかの浦に潮みち来れば潟を無み
葦辺をさしてたづ鳴き渡る　（赤人）

柿本人麿は、支那から文字と一緒に何か悪い習慣が入ってきて、人々が氏の名をとなえるようになり、人の世がこせこせと小さくなってきたその風潮を嘆いているのであって、だから上代にはそんな濁りはなかったのである。果たして蘇我、物部の二氏が相争った。

聖徳太子は人の心が一つにとけ合った国を再建しようとして仏教を取り入れた。ところが仏教は釈尊の厳しい戒めを破って政治に介入した。果たして腐敗堕落して迷信化し、人々を、言うことを聞かなければ呪い殺すぞと言って脅かした。

これは小我の最大の弱点を強く刺激したことになった。国民はひどく小我的になって、国の

基盤も弱くなり、大いに乱れる兆しが見えてきた。

このころになって、仏教はこの国の文化の中にも滲透し、西行の歌が出る。

心無き身にもあはれは知られけり
鴫立つ沢の秋の夕暮れ

実によい歌であるが、これは仏寺に到る道であって、その上に国を建てるべき土地ではない。果たして世は大いに乱れて武士が興る。そして実朝の歌が出る。

荒海の磯もとどろに寄る波の
破れて砕けて裂けて散るかも
箱根路をわが越え来れば伊豆の海や
沖の小島に波の寄る見ゆ

これも実にうまい歌ではあるが、初めのものは言葉の上だけのことであり、後のものは「林泉の布置」（形式だけで内容がないという意）という感じである。歌の調べそれ自体が非常に弱々しい。

これが武士というものの本質であろう。だから武士道の世になったということは、国の基盤

が非常に弱くなったということである。果たして国は乱れに乱れていつ果てるのかと思わせたが、それでも遂に治まった。

そして芭蕉の俳句が出る。

春雨や蓬を伸ばす草のみち

神代調の歌は知、情、意と分れる前の心の姿、即ち智をじかによんでいるのであるが、芭蕉は専ら情緒をよんでいる。そのためもとの智にもどして見なければわからないのであるが、芭蕉の句の調べに聞き入っていると、目の及ぶ限り万古の春雨が降っているように思えてくる。人麿、赤人のあと絶えて見なかった神代調を再びここに見るのである。この間千年に近い。

私はこの史実を見てはっきりわかった。日本民族の心の色どりは神代調である。これは目に見えない日本民族の心が持ち伝えているのである。

ここで再び神代調にもどるのでなければ、明治維新はあり得なかっただろう。そうすれば日本は亡んでしまっていたであろう。

道元禅師は、人は生の位、死の位とこもども踏んでいくのだと言っている。解脱しない人の死の位は中有といって非常に縛られたものだ、といわれているが、解脱した人の死の位は、肉体を備えていないのだから、至極自在なものだろうと思う。私は、高天が原の神とは解脱した

人の死の位に違いないと思っている。

日本には芭蕉のように、二千年に一人という大天才がいるが、こういう人は高天が原からじかに生まれてきてまたそこへ帰って行くのに違いない。かような人が生まれてくるのは、日本民族にその必要があるからである。

道元禅師もかような大天才の一人である。私はこの人には会ったことがある。

解脱した人の行為を見よう。応神天皇の末の皇子に菟道稚郎子（うじのわきいらつこ）という方があった。この方は自分が生きていたのでは自分が天皇にならなければならないという理由で、さっさと自殺しておしまいになった。解脱した人でなければ出来ない行為である。むろん仏教が渡来するより前のことである。

さっきの芭蕉の句でいうと、稚郎子が春雨で、仁徳天皇や「かまど」の民は草である。

その後にあっては坂本龍馬が解脱した人の典型である。龍馬には明治維新があればそれでよかったので、自分がその挙やその政治に参画しようとしまいと同じことだったのである。龍馬が春雨で、維新の大業を為し遂げた人たちや一般の日本国民は草である。

こういう人たちは、何かの目的を持って高天が原からじかに生まれて来て、するだけのことをすると、さっさとそこに帰るのである。稚郎子は世に範を示すために生まれて来られたのだし、龍馬は日本の滅亡を救うために生まれて来たのである。稚郎子は自殺なさったのだが、龍

馬は殺されたのではないかという人がいるかも知れないが、解脱した人にとっては、自分で死ぬと他に殺されるとは同じことである。

短く区切って見ると、日本民族は失敗に次ぐ失敗をもってしているように見える。しかし長い目で見れば、少しも無駄をしていないのではないかと思う。

支那から文字を伝えて以後、芭蕉のころまでかかって武士道を作り上げた。これが日本民族の準中核であって、中核をとり囲んでいる。人数は比較にならぬほど多い。なお芭蕉の頃の伊勢の内宮のあり方は、これまで私が何回となく各方面に言ったように、次のようであった。

春めくや人様々の伊勢参り
参宮と言へば盗みも許しけり

それでは明治以後はどうだろう。

明治の始めに西洋文明とともに物質主義（物質で総てが説明できるとしか思えないこと）を取り入れた。以後多くの日本人は小我（肉体）を自分だと思っている。しかし日本は西洋からものを見極めたいという意欲を取り入れたのであって、これはそれ以前にはなかったことである。物質主義はそれと共に入ってきた濁りであって、支那から文字を取り入れたときと同じ現象が起こったのである。この濁りは払拭しなければならない。しかし日本は無駄をしているの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ではない。

今一つ日本民族は明治の少し前から百年以上にわたって、力さえ強ければ何をしてもよいとしか考えていないような白人に、力を以て抗し死の戦いを戦った。私は日本民族は実にけなげだったと思う。

ところで、このとき主として働いたのは日本民族の準中核の人たちである。（この人たちは決して残虐行為はしない。まことの武士をみればわかる。私は戦後、日本に住みながら国を愛さない、昔から一緒に住んでいるのに同胞を愛さないという人たちの多いのに驚いているのであるが、これは人の心の底が凍ってしまっているためかも知れない。戦争で残虐行為をしたのはこういう人たちではなかっただろうか。準中核の人たちは、この戦争によって一層の磨きをかけられたことであろう。）

ところで武士道の最大の欠点は、自分（小我）の幸福を心から喜べないことである。神代調にこれもまた必要であることは、先きのすさのをの尊の歌を見ればわかるだろう。だから日本はいまそこだけを取り出して練習しているのであろう。戦後だけを見ると、ただ利己主義だけが目について、畜生道とも餓鬼道とも見えようが、ながい目で見れば、そういう意味があるのではないかと思う。

目に見える日本民族は、目に見えない日本民族の心に絶えず操られているのだから、この民

族の将来は心配がいらないと思える。

私は以上スケッチしてみた「日本民族」を表題にして一冊の本をかいて、それを見ていただいた上でそれについてよく考えていただきたいと思っている。しかしそのためには、私は大分勉強しなければならない。とても今直ぐには出来ない。それでその方は後廻しにして、もうこれ位で本来の日本民族の姿に帰ろうではないかと呼びかけたのである。

私はこの前の「一葉舟」で既にそう呼びかけ、今度二度目に呼びかけたのである。一葉舟では、もっぱら仏教の言葉によってそう呼びかけた。今度もはじめは矢張り仏教の言葉を借りて話し始めたのだが、話している中にだんだん神代調になってきている。

とにかくこの辺で立ち上がろうではないかと言おうと思った矢先き「昭和への遺書」という表題にしたいという書肆の意向を聞かされた。それに同意して出来たのがこの本である。

昭和四十三年三月

岡　潔

昭和への遺書／目次

一　敗るるも　またよき国へ

1　物質主義は間違いである……二
2　真我と小我……二七
3　山崎辨栄上人とその光明主義……三三
4　終戦後二十二年の世相……四三
5　真我の情……六三
6　真我の知……七五
7　真我の意……八七
8　日本民族……九一
9　西の子の文化……一〇七

二　光の陣備え（教育）

1　日本民族は何故闇と死の戦いを戦わなければならない

のか……一二九
2 日本の国という水槽の水の入れかえ方……一三一
3 童心の季節……一三九
4 自我発現の季節……一四九
5 情緒の目覚めの季節……一六三
6 旧制中学時代……一九五
7 旧制高校・大学時代……二〇五
8 異邦人の見た日本民族……二二五
9 情操型発見……二三三
10 神代の文化……二三一
11 再び情操型発見について……二四五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.